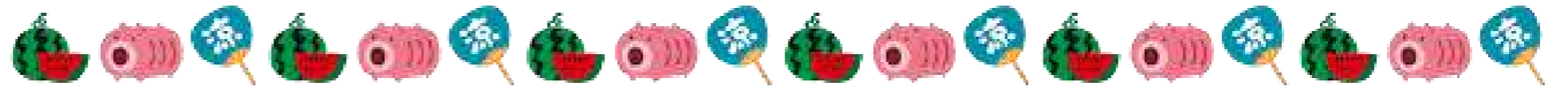


カスタネット通信8月号は6月23・24日に愛媛県松山市で開催された、第24回日本言語聴覚学会の報告Part2です。

シンポジウム



学会では、参加者が自分の研究や臨床について口演やポスターで発表する他に『シンポジウム』や『特別講演』といったプログラムも用意されています。『シンポジウム (symposium)』は日本語では『〔聴衆の前で意見を述べる〕 討論会』となります。つまり、「あるテーマについて何人かのシンポジストが意見を述べ、学会参加者と質疑応答を行う形式の討論会」です。今回の学会では『**高齢難聴者への支援～現状と言語聴覚士の新たな可能性～**』というテーマで4人が登壇し、シンポジウムが開かれました。このシンポジウムに、おぎはら耳鼻咽喉科の言語聴覚士がシンポジストのひとりとして登壇したので、その内容をご紹介します。



補聴器の試聴を始めるまでには、“自分の聞こえに目をむける”、“聞こえにくさを認識する”、“聞こえにくさに対応するために行動する(耳鼻科受診)”などの過程があります。この過程に数年、人によっては10年近くかかることもあります。そして補聴器の試聴開始後も、日常生活で活用するに至るまでには下のイラストに示したように越えるべき山が3つあります。

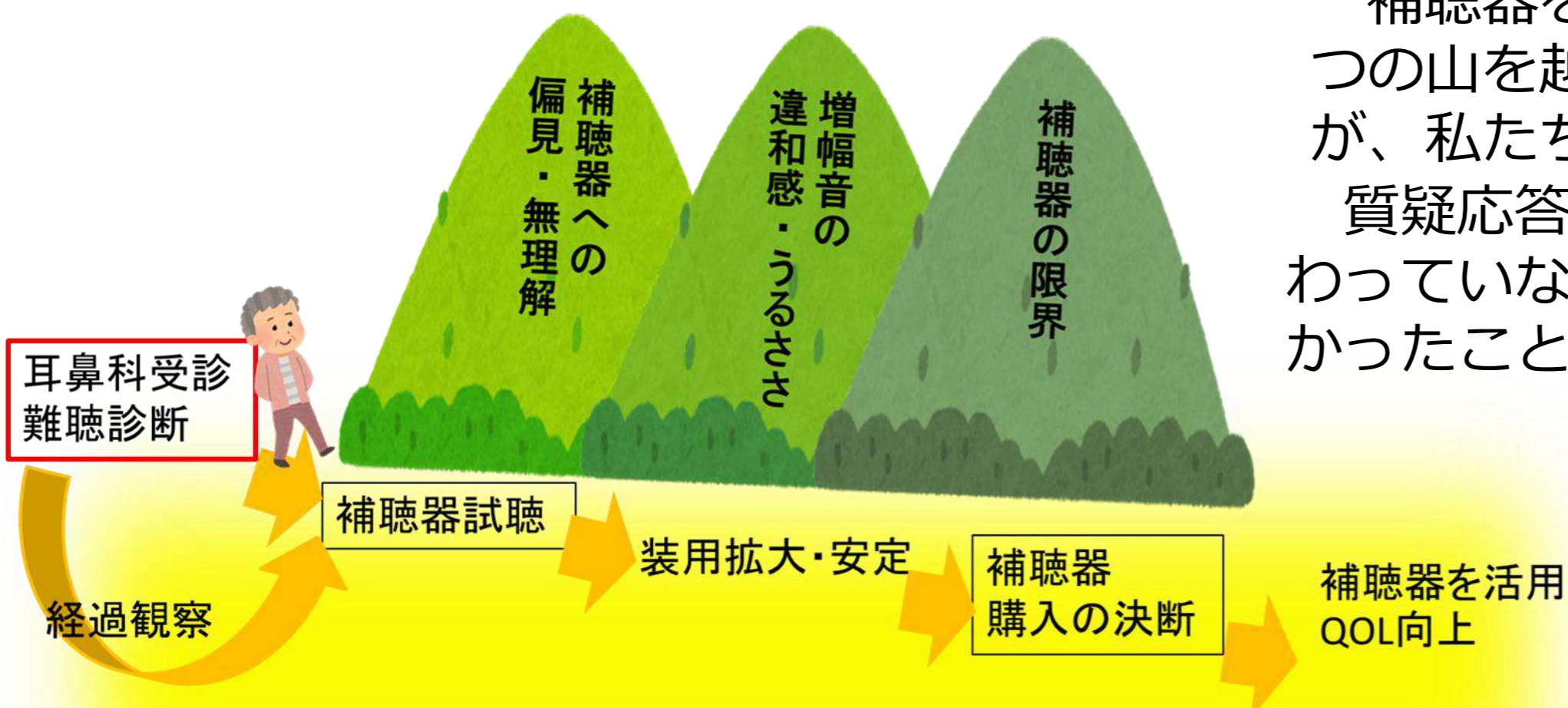
1つ目の山が『**補聴器への偏見・無理解**』です。“補聴器は雑音ばかりで役に立たない”、“補聴器はまだ早い”といった発言をよく耳にします。これに対し私たちは“導入ガイダンス”を行い、聞こえ・難聴・補聴器について理解の上、試聴に臨めるよう心がけています。

2つ目の山が『**増幅音の違和感・うるささ**』です。機械を通して聞くので人の声が以前とは違った音に聞こえます。また、難聴のために聞こえなかった換気扇やエアコンなど周囲の音が補聴器を装用することで聞こえてくるようになります。試聴期間中は補聴器の調整を行います。生活のあらゆる場面で補聴器を使用し、“新しい聞こえ方”に慣れていくことも大切です。

そして3つ目の山が『**補聴器の限界**』です。補聴器は万能ではないので、雑音下、反響のある場所、遠距離、複数での会話ではことばが聞き取れないことがあります。そのような補聴器の限界を知った上で、聞き易い場面を自分で工夫したり、聞き返し方を練習することが補聴器の活用のためには必要です。

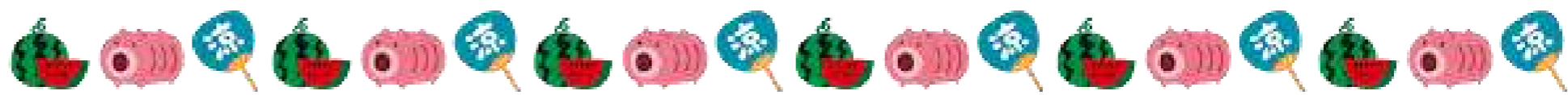
補聴器を試聴する方々が、これらの3つの山を越えられるよう手助けするのが、私たち言語聴覚士の役割です。

質疑応答では、普段は聴覚の臨床に携わっていない言語聴覚士からの質問が多かったことが印象的でした。超高齢社会の日本において、聞こえ・難聴・補聴器はコミュニケーションに関わる言語聴覚士にとって、重要な事柄であると考えます。



補聴器活用までに越えるべき3つの山

大洲 & 松山観光



2022年11月号のカスタネット通信に「学会参加の楽しみには、開催地の名物を食べることで、名所を訪れることもあります。」と書きました。今回は学会が開催された松山市から足を延ばして大洲まで行ってきました。



松山市



↑ 道後温泉(工事中)。建物は覆いがされていますが温泉には入れます。



↑ 難攻不落の松山城。賤ヶ岳の七本槍として有名な加藤嘉明が築城を始めたそうです。



↑ 坂の上の雲ミュージアムから撮った萬翠荘。昭和天皇が宿泊されたそうです。

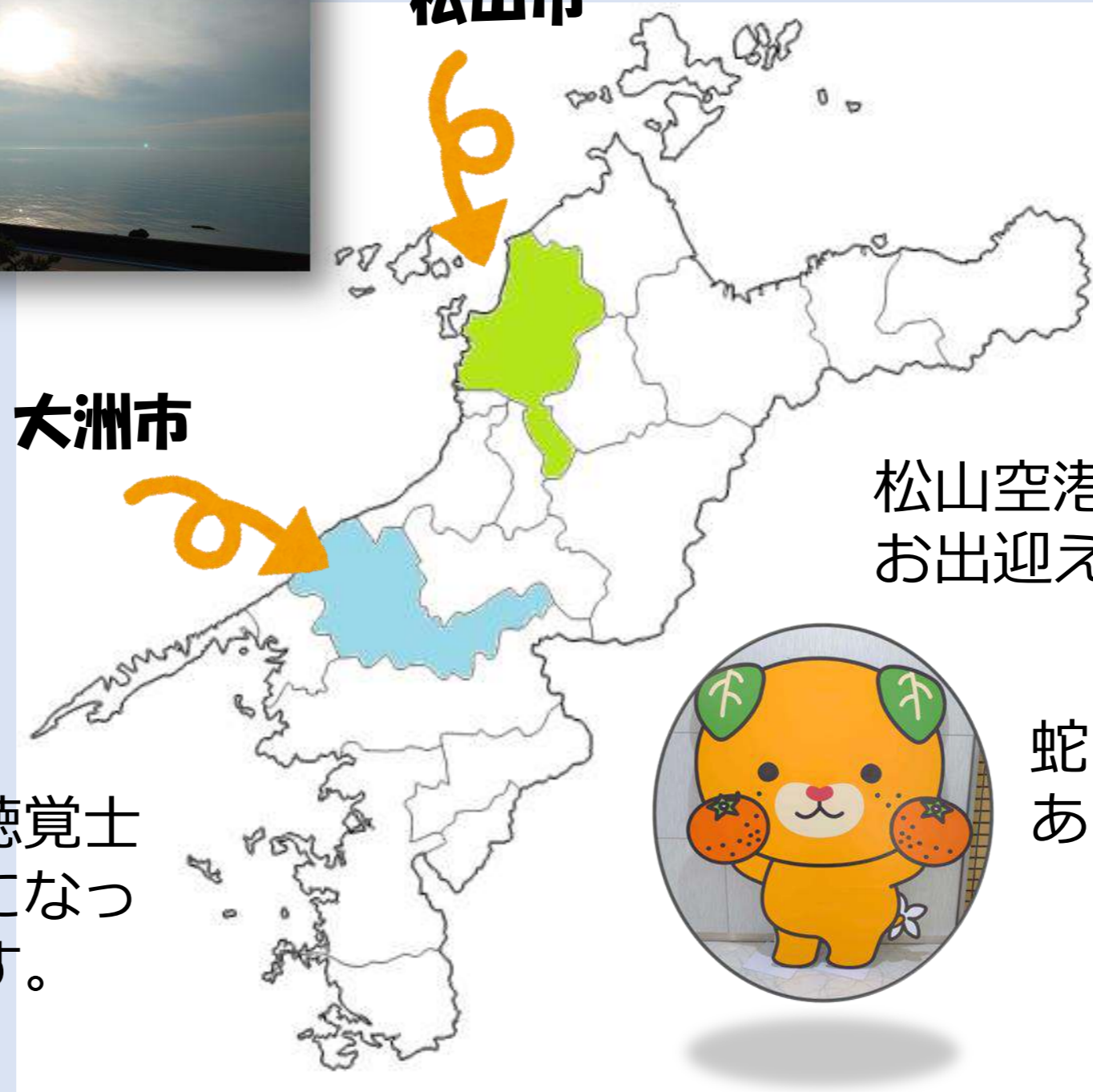


↑ ひと乗車180円で松山市内を移動できる市電。一六タルトのつり革がありました。

海岸線を走る電車の車窓から。夏至を過ぎたばかりでなかなか太陽は沈みません。



松山市



松山空港では「みきゃん」がお出迎え。



蛇口みかんジュースもありました！



JR予讃線

大洲には私たち言語聴覚士と院長が大変お世話になった先生が住んでいます。



↑ 大洲城。殿様気分です。宿泊体験できるそうです。



さつま汁

鮎

鮎

↑ 大洲の美味しいもの。



← 富士山(とみすやま)公園展望台から見た大洲の街並み。



→ 大洲城の天守閣からの風景。肱川の流が見えます。

学会前後の短い時間でしたが、愛媛県には美味しい食べ物、見どころがたくさんありました！



おぎはら耳鼻咽喉科